

あを 7

2015



焼 岳



須賀忠男

呼称 やけどけ

標高 2,455 m

焼岳は夏日に灼けて立つけぶり
ウェストン祭焼岳穂高湖心にあふ
落葉松は焼岳の岩の色となりぬ
焼岳の肌赫く霧晴れてきし
爽やかや焼岳の肌旭に映ゆる
焼岳の紅刷く夜明け柳蘭
焼岳のその上の上雲の峰
焼岳の又隠れたり夏の雲
念願の小梨満開上高地
紅葉かつ散りてかつ浮き大正池

水原秋櫻子
高島 茂
大平 節弥
長沼三津夫
橘 澄男
佐藤いね子
須賀 敏子
須賀 敏子
赤座 典子
鷹羽 狩行

あそ

七 月

端 書

佐藤 喜孝

東京

しろたへの蝶なか空をきりきざむ

身をかすめわらひ上戸の紋黄蝶

いかれどもわらへどほうほうはおほけきよ

この櫻ひだりを向いて咲いてゐる

武運長久などと牡丹花水木

山を出て海にうかみし白端書

端近で體をひねる錦玉羹



不慣れた前書を付けて先月「チンドン屋木登初戀富士登山」と出した。七月号が出来上り数日して木登りよりピアノがよかったなと思った。また「深更のテレビでトマト試し切」は前月号に「春深更試し切りするテレビジョン」で出した。おっちょこちょいな性格は治らない。後ろを確認しながら進まなければと反省しきり。自身の句をダブル投句をしてゐる内はまだ救ひがあるが？他人様の句ではさうは行かぬ。拙著『青窓眞』にも後に類句を知った。「賽の目の一つは朱し秋の暮」には「骰子の一の目赤し春の山 波多野爽波」。「春の蒲団昔は韓と陸つづき」には「佐渡ヶ島ほどに布団を離しけり 權未知子」「鶏卵を頭のあたりつつくたく」には「うちつけて卵の頭蓋割る晩夏 皆吉司」。じょうさんに教へられた千代女の桔梗の句にそっくりな句も作ってしまった。このごろ類句を怖れてゐたら手も足も出ないと諦めてゐる。

☆

篠田

純子

東京

佃煮の桶傾げ干す桜東風

岩煙草やぐらの闇へ目を凝らす

卯の花腐し黒き雀の首長し

足菱への子雀寄り来瘦せてをり

ぬめぬめと上下する鶉や迎へ梅雨

電話器無き公衆でんわ走り梅雨

港区浜松町に人骨出たと走り梅雨

蚪 蚪

定梶じょう

石川

この花のこの名をもらひ金鳳華

恋猫に飛行機雲の音もなし

あさぢふの小野のやまどり立夏かな

苗いとけなき田に大盤石すわる

分教場放課の教師ほととぎす

新緑のとりわけ眠く五時限目

千枚田生れのおたまじゃくしかな

仕事にもだいが慣れてきて、落ち着いてきた。日々単純作業の繰り返しなのだから、前倒しして仕事をすれば、ゆとりが生まれる。素材を探してみるが、さっぱり詩どころが湧かない。週に一人位窓口に、クレームをつけに、いろいろな人がくる。こじれると、時に警察官を呼ぶ時もある。そんな時以外は退屈だ。

郵便室に、日に六七回郵便を出しに行く。文書係のミさんは雀に餌をあげているが、どうも鳩が寄ってくるようだ。郵便室の窓の外から、餌目当ての雀や鳩がこちらに、視線をおくってくる。ある日見たことが無い鳥がこちらをみている。野鳥かな？よく見ると鳩の雛だった。

増上寺の入相の鐘が鳴ると同時に退庁する日々である。

かつて、〈禁煙を続く春愁にも堪へて〉を会に投句。禁煙を続く、が変だ、という指摘があつて。

口語の「続ける」は文語では「続く」が言い切る形なのだが。しかし「禁煙が続く」の方が客観的ではある。あるいは「恋う」という語は現代、「恋う時・恋へば」と遣うがいわゆる文語では「恋ふる時・恋ふれば」と活用した。だから〈夫恋へば吾に死ねよと青葉木菟〉橋本多佳子の「恋へば」は口語であるわけだ。

文語文法云々を口にする俳人は大概こんな時「文法の誤り」なぞというが笑止。近世近代以後の文法を使つてどこがおかしいというのだろう。活用の煩瑣を厭うてはいけけないのだ。

啓蟄やうごめく古語の活用形

井上石動

☆

須賀敏子

埼玉

目高追ふズボン濡らしてあねおとと

連休の一日たっぷり豆を煮る

朝の陽にいいよ白く山法師

降り立ちし島の空港風青し

雲の峰島の中心郵便局

自転車で竹富島に蝶の群

怖いことしてみたくなりダイビング

村芝居

竹内弘子

埼玉

石段を登りて降りし春の宵

図書館の陶の傘立てみどりさす

三度笠なんども翳す村芝居

初夏や魚屋で売るみどり亀

ふくらはぎ冷たし五月のはりえんじゅ

末の子に五十加へて杉植うる

俳諧の枝葉末節ぶだうの芽

五月十一日〜十八日、山仲間六人で沖縄へ行った。台風の近づく石垣島へ、真夜中風速四十五メートルで台風は通り過ぎた。大した被害も無く十二日からアウトドアの日々。シュノーケリング、カヤック、登山、蛍見学とガイドと共に二日間楽しんだ。竹富島で一日過ごし、慶良間諸島の阿嘉島へ移動。ケラマブルーの海に感動。今回の目標「体験ダイビング」に挑戦。珊瑚に群がる色とりどりの魚達。翌日シュノーケリングでブカブカと遊び、那覇へ戻った。十七日の日曜日、那覇では辺野古基地反対の県民集会に三万五千人が集まった。十八日の沖縄の新聞は何面も使ってその模様を報じていた。無事帰宅して読売新聞を開けると、社会面の片隅に三万五千人が集まったと小さく載っていた。

安岡正篤「百朝集」より

世の中を夢とみるみるはかなくも猶おどろかぬわが心かな 西行法師

僕は唯一つ不思議な願ひを持つてゐる。戀愛でもない大科学者・大哲學者・大宗教家になることでもない。理想社會の實現でもない。結局それは「喫驚したい」といふ願ひだと國木田獨歩が「牛肉と馬鈴薯」の主人公に叫ばせてゐるのは有名である。人間は段々驚かなくなる。即ち純眞熱烈に感じなくなる、麻痺してくる。善にも、惡にも、何ともなくなつて來てをる。夫婦親子兄弟が殺傷する世の中を二十世紀人は案外平然として暮してをる。秦の始皇帝も随の煬帝も、アッチラもネロも、マラーダントン、ロペスビエールも魂消るやうな暴力的罪惡を一向罪惡と言はぬどころか、それを人民の解放とか正義とかうそぶくやうな政治が傲然として行はれてをる。人類が何千年もかゝつて漸く造りあげて來た文明が恐ろしい破滅に瀕してをるのに、文明人がそれを驚かない、恐れぬ。12頁へ

梨咲く

田中藤穂

東京

青楓仏足石に影ゆらぐ

梨咲いて人みな遠し相模の野

夏潮やビュツフェのサインでかでかと

蔦若葉独りの生活音のなく

朝毎に太りて杏まだ青し

朝風呂に人体図めく五月かな

土産にと曲り胡瓜を二袋

黄水仙

長崎桂子

三重

黄水仙ほほゑましき事出会ひたし

黄水仙帯を成しをり園の北

風来たりほほゑみ歪む黄水仙

お屋敷の躑躅生垣カラフルな

風五月青の濃淡水彩画

五月晴何に出会ふか靴磨く

五月雨るゝ駅のホームに人溢る

私の家の塀の青蔦は娘の嫁ぎ先から戴いたもので大事にしていたが、四年程前から新しい葉が出て半月もするとボツボツと茶色い斑点が葉に出て汚ない。車の通る道は他所も谷中の墓地で切っていた人から一枝戴いてきたのがついた冬蔦は冬も青と葉があり病氣にもならない。

青蔦は五月末頃小さな粒の様な花をつけとても良い香りがする。以前は秋になると紅葉してきれいだった。黙って戴いていつてガラスのテーブルの下に入れてありますなどおっしゃる方もあったが今は駄目。でもその代わりに恩師の家で一枝戴いて挿した定家墓が増えて、いい匂の白い細かい花を沢山つけています。

お正月を過ぎて店を締めていた隣家の商店を、解体業者が四月下旬にやってきて建物の解体をしますからと、直ちに其の日に始まった。

あれから約三週間、一日中震度二で揺れている感じの五日間があり、轟音の騒々しさ、風に向きの砂埃に急にやって来た暑さの悪条件で、疲労困憊の状態が続いて居ります。

それにしても早くやってきた暑さで、草木は青青と元気に生育しています。肖りたいと眺めています。

緑

森

理

和
東京

蔓伸ばす意志を示して探しをり

切り株の太き端より芽の出でし

青高く黄緑みどり深緑

飛び立てり黄緑みどり深緑

警笛や緑を開き単線路

蜥蜴蛇篝火の台鳥休む

五つ六つホームの麻雀の巢

☆

山莊慶子

埼玉

子雀の滑り落ちしが飛びたてり

茅花野は父と歩きし野道なり

立葵紅白ピンク小庭なる

三輦の電車走りて夕焼雲

額の花思ひ伝はる師の握手

一年生ゴール目差してよいドン

徒競走並びたる子に夏来る

9頁より　そもく人間が驚かうにも、驚くその自我といふものを恐ろしく喪失してをるのである。車中で見たことであるが、朝永三十郎の「近世に於ける我的自覚史」を手にした青年が、二三の學生とその學校の教授らしい紳士と聲高に話してをる。その本を批評してをるのである。ふと私の心に囁くものがあつた。この面々は「我的自覚史」の「我」をどう考へてをるのであらうか。「最近に於ける我的自覚」は？と聞かれたなら、何と語るであらうか。楠正成が奈良の途上、見知らぬ法師と道づれになつて法話を交へながら歩いてをると、貴方は何とおっしゃるお方かと僧が尋ねた。楠多聞兵衛正成といふものです。しばらくして僧は呼んだ、正成ー唯（はい）と答へる正成に、すかさず僧は切りこんだ、その正成は何でありますか。正成これによつて大いに得るところがあつたと禪僧がよく語る話である。我々は皆我が名を知つてをるが、その我れそのものを知つてをるであらうか。

一年生の孫の小学校で五月末運動会が催された。息子の頃には順番をきめるのは良くないという事で徒競走は中止だったが、今ではやる事になつていて一年生百四十一人が五名づつ全員頑張つて五十米走りぬきそれぞれいい顔をしてゴールに入つてきた。見ていて胸が熱くなる思いがした。

孫が団体リレーの選手にクラスで選ばれて走ると云う。最初の走者一年生女子六名のうち「練習ではいつも一番だよ」と言っていたが本番では四番だった。でも彼女はにこにこ笑顔だった。暑かっただけで私にとつても楽しい一日でした。

芍 薬

赤座典子

東京

見慣れたる家並揺らす若葉風

向き変へる頬くつきりと四十雀

だからといふ諍ひ聞ゆ夏柳

傷つきて寂しさ少し薄暑光

炎天のコート勝者の安堵顔

母の日の枇杷ほくほくと頂戴す

おばあちゃんにと供ふ芍薬馥郁と

五月の日々

秋 川

泉
埼玉

坂上り天と競へる蔦青葉

歩み寄り卯の花垣に母の影

夕暮れの毒空木ある林かな

夏めくや白きドレスが輝きて

若葉よりキラキラ光るイヤリング

六義園群青色の木下闇

ただながむ松の落葉のみごとさよ

結婚した娘が我が家に来るたびに花を持ってきてくれる。いつも駅前の同じ花屋に寄るので顔馴染みになったと言っていた。

そんなに沢山ではない切り花を母の写真に供えてくれるのだが、一周忌にあたる今回は濃いピンクのミニ薔薇・ピンクのカーネーション、そして三本もの芍薬とともに豪華であつた。

まじかに見る芍薬は 花びらを散らしもせず 日に日に薰り高く大輪となつていく。

私達が働いている間、甘やかさず、しっかり育ててくれた母は、孫二人のよき理解者であつた。本人達にもそれが伝わっていて、何事でもよく話していた。本当にありがたいことである。

日々立派さを増す芍薬を見ては、様々な事を思っている。

『ミャー』の異変。それは、キラキラ太陽の下、ビー玉のような黒眼を大きく見開いたまま、壁にぶつかり柱にぶつかり。野生のノラがそんな風では本当に大変なことだ。又ある時は元気に走った。がしかし、庭の洗場の角に激突した。獣医が、「その猫を治療して家猫として飼いますか。」「いいえ、触れることもできない九年も外で暮らしている猫です。」「それなら、そのままにしておくしかない、その眼は治りませんよ。」と見えていた世界が消えても、ミャーは今日も生きている。もう走り廻らない。ただじつと縁の下の箱の中にいる。臆病な性格がもつと臆病になった。朝夕お腹が空くと出て来る。獣医は、猫はあるがまますを生きているので、今苦しく悩む事はないと云つた。

☆

井上石動

山梨

妹背鳥近くある夜や茶漬飯

想ひ出は裡へ仕舞へや青嵐

峰に雲のいきいきと生れ立夏かな

県道の白線眩し立夏かな

木洩日のなづさふグラス青葉風

暮れ残る甲斐善光寺青葉風

太公も舌巻く風情鮎解禁

☆

王

愛知 岩

更衣曲線婀娜に成りにけり

青嵐匂やかに舞ふ乱れ髪

雨燕逆巻く浪を掠め飛ぶ

恋人を目で追ふ子ある宵宮かな

古の子我も羨む昼寝かな

踏まれどもなほ咲き誇る苔の花

俳優・渡辺 謙

高校まで地元新潟、卒業後上京。劇団の研究生となり、現在に至っているらし。しかるにブロードウェイで「王様と私」の主役を張り、米語と歌と踊りの舞台上に立っている。私は「役者は、踊れて歌えてナンボ」と思っている。「歌えて、身体がキレる役者」。こういう役者が、今の日本の芸界に稀有。ちよっと思い出して、エノケン・森川信・由利徹・三木のり平・有島一郎など、昔は「達者な役者」多し。今は、ワンパターン芸で、まいたびくり返しドラマに出ている役者ばかり。芸人もダメなら、プロデューサーもダメ。そんな折、米語・歌・踊りの世界の住人ではない渡辺が気を吐いてくれているのが嬉しい。しかし、「クローズアップ現代」に依ると、今のブロードウェイは、有名役者で観客動員を稼ぐ方式になって来ているとか。これじゃあ、日本のドラマ業界とおんなじじゃん。ブロードウェイも凋落の道を辿るらむ。本場アメリカよ、お前もか！

眺望

俳句 蕪村
漢詩訳 王岩

更衣野路の人はつかに白し

更衣時節野路上、行人遠去一点白

涼しさや鐘をはなるかねの声

鐘声去悠悠、清涼来爽々

不二ひとつづみ残してわかばかな
層々新葉埋不尽、亭々富士孤峰高

参考

仙客来游雲外巔、

神龍棲老洞中淵。

雪如 素煙如柄、

白扇倒懸東海天。

石川丈山・「富士山」

誰将東海水、濯出玉芙蓉。

蟠地三洲尽、插天八葉重。

雲霞蒸大麓、日月避中峰。

独立原無競、自為衆岳宗。

柴野栗山・「富士山」

猫の道

大日向幸江

埼玉

花リング端から端へと猫の道

夏めくは夜の湯上りの肌に似て

両の手に持ちきれぬ程夏野菜

夜もすがら煮つめてをりぬ夏みかん

この頃は頭痛腰痛夏嫌ひ

参道のだんご屋夏の品揃へ

端居して猫ニンマリと笑んでをり

齊藤裕子

東京

不機嫌の訳二つあり葱坊主

両の手で目を隠す猫若葉風

待合室の肉じゃが談義柿若葉

玄関に荷置きしまま花殻摘み

傍で蜂のハミング花殻摘み

存えてこの木々愛でん花殻摘み

植込みに小さき一叢蓮華草

仁に過ぐれば弱くなる。義に過ぐれば固くなる。禮に過ぐれば諂となる。智に過ぐれば嘘をつく。信に過ぐれば損をする。

気長く心穏やかにして、萬に倅約を用て金銭を備ふべし。倅約の仕方は不自由を忍にあり。此の世に客に來たと思へば何の苦もなし。朝夕の食事つまからずともほめて食ふべし。元來客の身なれば好嫌は申されまじ。今日の行をおくり、子孫兄弟によく挨拶をして、しゃばの御暇申すがよし。

伊達政宗家訓

安岡正篤「百朝集」より

5月11日のCT検査で病氣再発と診断され、抗癌剤治療を再開する事となった。もう一度仕切り直しである。前回にも増してショックが大きいというのが、正直な気持ちかもしれない。今回は、前回と同じ2種類の抗癌剤に1種類の新薬も加えての治療だ。副作用も心配だが、新薬を使える事を幸いと思つて闘つていかなければならない。家族はもつとショックを受けているに違いない。癌と共存しながらでも、もつと生きる事に貪欲になつて、新薬の効果と生存率のアップに貢献できるよう頑張っていきます。俳句に自分の思いを吐き出しながら。(5月30日)

九 条

佐藤 恭子

東京

五月三日澄みし天空九条晴

鴟尾^{とびのう}を越えて奥つ城花の舞ふ

春麗水輪をこはす鳥番

九窮にひとつふえたり四月馬鹿

触れもうて草のいろいろてふてふかな

燕身にあまりたるもの銜え

塵取をすつかりおほふ椿かな

何年か前、食べるために買った山芋

が置き過ぎてしまったのか端の方から芽が出てしまった。その部分を取って食べてしまつてから、捨てるときにそうだ！植えてみようと思いついた。

高島茂が元気にボルガのカウンターに立っていた時は時期になるとアルミの弁当箱に詰めて頂いてきたものだ。それを思い付き大きくなつたらもつけものと。植え替えもしないで鉢の中で三年くらい経つただろうか、去年実をつけたのだ。むかごを見てあこ頃を思い出していた。ボルガが終わって毎日のように電話があり、何時ものカラオケのある小さな呑み屋・別の呑み屋さん・お寿司屋さん等帰宅は二時三時であった。今にして思えば懐かしいに尽きる。今年は食べられるかな？と思うぐらいいっぱいになっている。むかご飯の他の食べ方を調べなくては。

六月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

初音かな脳天直下足のうら

佐藤 喜孝

今年初めて聞く鶯の声。その感動を「脳天直下足のうら」と表す。雷に打たれたかのように、作者の全身に初音の感動が走ったのでしよう。優しい平穏な感じの「初音」に対して、「脳天直下足のうら」という激しい表現、そのギャップ。作者の感性の若さに驚きました。（裕子）

チンドン屋木登初戀富士登山

佐藤 喜孝

「爲残したこと」と断り書きが付いている。為残すとは、仕事を途中でやめてあとに残すこと、しかけてやめること、とある。列举されている中に、チンドン屋がある。私は田舎で育ったせい、今までにチンドン屋を見た記憶は三

回しかない。お侍の格好の男の人や、日本髪のを鳴らし、クラリネットを吹いたりしながら、とても楽しそうにビラを撒いて歩いていた。そんな記憶です。作者はチンドン屋を見たのではなく、チンドン屋をやるうとしたことがあるの

でしょうか？何だか、作者の色々な人生経験を聞いてみたくなりました。木登りと富士登山は、途中で止めてしまったという事は誰でもあり得る事と思うのですが、ここに初戀が並んでいるから面白い。為残したチンドン屋も木登り富士登山も、もう一度挑戦する事は不可能ではないと思います。初戀だけは叶わないなあと思いました。（裕子）

日のひかりとりこみ水面春謳歌

佐藤 恭子

水が光をとりこみまさに春を謳歌してゐるといふ。木も草も鳥も虫も出てこない。少々硬い表現が気になるが興味のある作品である。

(喜孝)

クリームソーダつきこぼして退職す

篠田 純子

作者は、今まで外勤だった職場を退職されて、内勤の職場に再就職なさった。その奮闘ぶりは6月号の随想に書かれていて楽しく読ませて戴いた。5月号の作品「春埃シュレッターして退職す」も作者の潔さが出ていて、小気味好い句だと思いました。職場を去る作者には色んな思いがあつたでしょう。シュレッターする作者、クリームソーダをつつきこぼす作者、色んな思いをそうやって払いのけ次へ颯爽と進んで

行く。作者のちゃきちゃきの江戸っ子らしさが表れていて、読んでいる私まで晴れ晴れとした気分になりました。(裕子)

風ひかる少女の脚の直線美

篠田 純子

すぐにビュッフェの絵をおもった。彼の描く手足は筋肉がない。力士の大乃国を描いた作品を見つけた。太つてはゐるが病人のやうに立ってゐる。「睨合い」といふ画題だが相手の力士は描かれてゐない。周りに描かれてゐる行司・検査役の引き締つた顔つきと対照的である。掲句は「直線美」の一言で少女期の女性の美しさを見事に捉へてゐる。季語も申分ない。(喜孝)

春雪や小樽の店のあんこ飴

田中 藤穂

なん回読んでも温かい気持になる句だ。小樽に居ても東京に居てもよい。小樽の店で作ら

れたあんこ飴を口にしてゐる。雪のやうなさらし飴の切口からちよつと覗くあんこが可愛い。小樽とあんこ飴の関りは知らぬが地名の活きた句である。(喜孝)

牡丹の芽屋根からラジオ家が建つ

森 理和

家を建てるときの音は心地よかった。音といても釘打ぐらいか。あとは傍に行かなければ鉋も鋸も静かな音であつた。今は釘打を含めほとんどが電動化された。趣はなくなったがそれでも厭な音ではない。家が建つうれしさを共有したいからだらうか。今時は作業音に加へてラジオを点けている現場に出くはす。掲句のラジオは屋根から聞えてきた。明るく明快な句である。(喜孝)

バス停に白鷺一羽立ちをりし

山 莊 慶 子

不思議の世界である。アニメ「となりのトトロ」に似たシーンがあつた。雨が降つてゐるなか、大きな傘を挿し妹を背負いバス停に立つてゐる。傍らに大きなトトロがちゃんまりした傘を挿してたつてゐるシーンである。トトロの世界は夜。掲句は白昼夢のやうな世界である。読んでゐる内白鷺がトトロのやうに大きくなつてきた。(喜孝)

うららかなや挑み続ける滑り台

赤 座 典 子

子供は滑り台が大好きだ。初めは大人に抱っこしてもらつて滑る。何度も何度も。そのうち一人で滑ることに挑戦し始める。初めはこわごわ。しかし一度一人で滑る事に成功すると楽しさは倍増する。滑つては階段へとことこまっしぐら。その繰り返し。段々上手に滑られるようになる。「挑み続ける」に滑り台に夢中になっ

ているお孫さんの微笑ましい様子がよく表れていて、お孫さんの成長を見守る作者の温かい眼差しと幸せな気持ち「うららかや」に込められていると思いました。（裕子）

春光のみちみちてゆく疾走馬

秋川 泉

作者は競馬がお好きだとお聞きしたので、この句も競馬場を全速力で駆けてゆく馬を詠っているのかもしれない。しかし私は緑の草原を疾走する馬を思い浮かべました。春色の景色の中、たてがみを靡かせて駆けていく馬。「春光のみちみちてゆく」という表現がとても魅力的だと思います。（裕子）

春光のみちみちてゆく疾走馬

秋川 泉

馬に限らず全力疾走してゐる豹も人間も美しい。特に走るために生れた馬の疾駆の姿は格別。

削ぎ落された必要だけの筋肉。手入れのされた馬体はキラキラと耀いてゐる。その疾走馬を見てゐると泉さんのからだの中は「春光のみちみちてゆく」のである。（喜孝）

麦秋の真中を行くよ嫁さん

井上 石動

お嫁さんは車に乗ってゐるのだらうか。いや、でしゃばりではないオヨネに手を引かれて歩いてゐて欲しい。よく見かける田園風景の中を嫁入りの行列が行く。中七の「……よ」に詠者の喜びがある。「真中」には麦畑の広がりを伝える働きもある。（喜孝）

鯉老いて真中を行く秋の暮

藤田 湘子

広重の夕立激し大橋に

王 岩

「あら楽し雪残りをる夏山路」に始まる乗鞍

高原の素敵な旅。激しい夕立にも遭われたようですが、それも素敵な句になる旅の思い出。激しい夕立の時は、雨が風に流され、幅のある白い縞模様に見えます。作者は、まさに広重の浮世絵「東海道五十三次」中の「庄野」のような景色をご覧になったのでしょうか。夕立の様子が目に浮かんでくる句でした。（裕子）

きた。ひよつとしたら、お孫さんはまだ幼いのかも知れないと思いました。親御さんにしてはちよつと困ってしまうところでしょうが、作者はこれもお孫さんの成長の証と、大らかに受け止めていらしやるように感じました。（裕子）

大股で二歩ずつ歩め蝸牛

斉藤 裕子

お下がりを嫌う年頃更衣

大日向 幸江

3人兄弟の中、女ひとりで育った私は、お下がりをくれる姉がいなかった。一度親戚のお姉さんに、夏のワンピースとブラウス、エナメルの靴を貰った事がある。とても嬉しくて喜んで着たのを覚えている。この句はお孫さんでしょうか？お年頃になるとお洒落にも敏感になり、好みもはっきりしてきて、今まで文句も言わずに着ていたお下がりやを嫌がるようになって

〈日雷転移再発想定内〉と詠んでをられるが、

季語の日雷に作者の揺らぎが読みとれる。掲句は「再発」と題する特別作品のなかでも異色の趣を有する句である。群作の中の一句として読むと作者の云いたことがヒシヒシと伝はる。しかし背後の事情を抜きにしても丈高く自立してゐる佳吟である。「せつかちとのろまの二人春の雲」のふたりできつと乗越えられる。（喜孝）

初音かな脳天直下足のうら
 日のひかりとりこみ水面春謳歌
 風ひかる少女の脚の直線美
 墓の数屯するかにうららけし
 気が付けば空ばかり見て四月尽
 葉桜や立ち暗みとも余震とも
 春雪や小樽の店のあんこ飴
 菜の花の咲いていづこも笑聲
 牡丹の芽屋根からラジオ家が建つ
 バス停に白鷺一羽立ちをりし
 うららかや挑み続ける滑り台
 春光のみちみちてゆく疾走馬

佐藤喜孝
 佐藤恭子
 篠田純子
 定梶じょう
 須賀敏子
 竹内弘子
 田中藤穂
 長崎桂子
 森理和
 山莊慶子
 赤座典子
 秋川泉

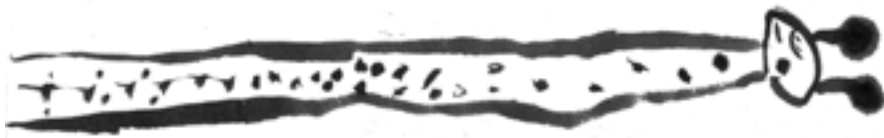


麦秋の真中を行くよお嫁さん
 白雲の棚引く夏嶺雨上がり
 子育に疲れた燕電線に
 自転車で素つ飛び巡るさくらさくら
 せつかちとのろまの二人春の雲
 日雷転移再発想定内
 さくら貝遺言のやう句を作る
 大股で二歩ずつ歩め蝸牛
 まあだまだと神追つ払ひ鰻喰ふ
 詫びるよに告げる再発額の花
 言の葉に力を貰ひ夏迎ふ

井上石動
 王岩
 大日向幸江
 斉藤裕子

々々々々々々々々

喜孝抄



まい

雲の峰 六月号

蠟燭のちさく爆ぜたる徂春かな 朝妻 力
薫風に酒置く近江泊りかな 々

馬酔木 六月号

花満ちし会津に残る一本気 徳田千鶴子
緑立つ高々と子を抱きあげて 水原 春郎

沖 六月号

わつと煮る潮うねりの鹿尾菜かな能村 研三
緩みなき薬整へて黒牡丹 々

末黒野 六月号

中腹に白亜の館山笑ふ 小川 玉泉

春燈 六月号

天上に百花の吐息夕ざくら 安立 公彦

槐 六月号

春田力つごとくに一句一句かな 高橋 将夫

鳴 六月号

たんぼぼや手足素直におとろふる 井上 信子
陽炎の向かふにすでに集ひをり 風間 史子
大曲の総譜となりぬ牡丹雪 相良 牧人

船団 一〇四号

鯉跳んで昼の火星が接近中 坪内 稔典

年取らぬ老人ばかり酔芙蓉

峰 六月号

風鈴の音に表も裏もなし 布川 直幸

風土 六月号

初蝶の三尺飛んできがやけり 神蔵 器

万象 六月号

椿とぶ風かおしやれか高齢か 大坪 景章

櫻 Summer号

蟻穴を出て老人が 一列 火箱 ひろ
花冷えやエレベーターに息満ちてはしもと風里

京鹿子 六月号

林出て里へひとすぢ日永なる 豊田 都峰

萱 七月号

せせらぐや春の去りゆくしづけさに 木村 嘉男
あんなことこんなことな日盛りの 亀田虎童子
意のままに動かぬ心八重桜 小島 良子

朝 六月号

ゆふやけに夕日が溶けて蝸牛 岡本 眸

集 56号

兄弟に夭折の父鍋囲む 大山 夏子

雨月 六月号

三人が空に並んで松手入 辻村 拓夫
素うどんも川の流れも秋の暮 寺田 良治
赤のまま手のなる方へ行くものか 野本 明子
吾に指輪こけしに膝のなき良夜 谷 さやん

金玉羹

天王山からきらきらと竹落葉 宇都宮敦子
蜘蛛の囀の一本遠き枝つかむ
踊の輪歪はいびつなりに進む
発条の玩具拾へる秋の蟬

金木犀町の隅まで知りつくし

空澄みて町のどこかにチンドン屋

薄氷の端セロファンのやうな水

芹の上流れて水の軽さうな

胸元に來て初蝶の眩みけり

八田木枯句碑開き 三句

はくれんの翔びたき日なりたましひも

水音に声紡ぐなり春の鳥

旅立ちの春の障子を閉づること

行く春や海の青さの伊勢木綿

斜交ひに坐る仲なり鱧の皮

一車輻切り離されし雲の峰

梅を見る楽しみ日々の開け閉てに 大橋 暁

六花 六月号

壬生祭のかんでんがんでんかんでん 山田 六甲

霽 七月号

日の温み残る夕空聖五月 松林 尚志

菖蒲田は絵巻よいつか高みなる 藤田 宏

俳句通信 八六号

金子兜太

老人は青年の敵強き敵

筑紫 磐井

俳境流連

七月や浮津に咲きし白い花

恭子

(二〇〇一年九月)

疎開をしていた福島之三春町（母の実家）には今あちこちに絮が飛んでもすごい繁殖力で増えているコスモスに似た花が咲いていた。この花と少し違うところは、花の色が本当に色があるのか、と思うくらい淡い色だった。一軒一軒に橋があつて家に行くようになっていたので、お屋敷みたいだったように、今になって思うとそんな感じがする。そんな花が母は好きだった。そのせいか私の好きな花もあまり色の濃くないものが好きだ。十月桜もそういえば桃色が白に近い色だ。最近になって（年を重ねた）ふと思ったことがあった、母が花の色の薄いのを好きだったのは短命だった事の証拠になるのかな？なんて。

星の一つになっている母も浮津にきては見えていそ



うな気がする。

金魚売りごゑも水泳ぐかに

藤穂

(二〇〇三年九月)

いたずらに昔ばかり懐かしんではいけないと何時も自分に云いかせているのですが、ビルばかりになってしまった街やアスファルトに固められた道路からは仲々俳句の種を見つけられなくて困ります。戦後も七十年というのだから、私が生家^{さと}で過した子供時代など実に遠い昔になってしまいました。戦後間もなく嫁いできた田端は爆撃の荒廃の中、芥川龍之介家の焼跡で、うちは大麦や落花生を作ったのだから、今の人に話しても解るわけがない。

さて掲出の一句は、私の子供の頃即ち昭和十年代の風景なのです。私の家は日暮里の寺町にあつて、家の前は道をはさんで経王寺の石塀、裏は四目垣の

むこうは延命院の庭、その他にもお寺だらけの静かな町でした。朝夕に延命院からきこえる木魚と読経の声を聞いて育ちました。

あの頃は東京もまだ自動車など少なくて、日暮里駅の出口にはいつも五、六台の人力車が客待をしていました。お医者様など往診の時には人力車でいらつしやる事もありました。父が誰方かのお通夜などに伺う時、駅へ行つて人力車を呼んでくるお使いに行かされたものでした。家の前の道は大八車を曳いた馬や、下肥を入れた桶を積んだ牛の曳く車、その他のいろんなものが通りました。

諏方神社の裏に前田公爵家の墓地があり、お詣りに見える日には立派な自動車が何台か連なつて通り、あの通りの両側の家にお仏供（白い落雁のお菓子）が配られました。

家の前を通る物売りの中でも楽しみなのは風鈴屋と金魚屋、風鈴屋はその涼やかな音色が聞こえてくるのでわかります。金魚屋は水の中に金魚を入れた

四角い入物をいくつか乗せた車をひいてきました。今思うと、私の家は日暮里駅から御殿坂を登った所、どちらへゆくにも坂があったのに、金魚屋さんほどの坂を上ってどの坂を下りていったのでしょうか。入物の中には、出目金とか蘭鑄とか、大小に分けた和金とか、藻や目高などが涼しげに泳いでいて、子供が家から出てゆくと車を止めてくれました。そしてまた静かに車を曳いて諏方神社の方へ去ってゆきます。

その売声は「きんぎょ——えい、きんぎょ——」とゆるやかに澄んだ美声で、水の中を泳いでる金魚の姿のように、漂うように涼しく……

金魚売の小父さんは紺木綿の短いパツチに丸首の白木綿のシャツを着て、いでたちも涼しげでした。金魚売のおじさんは夏の間あして金魚を売って歩いて生活が立ったのでしょうかね。

紙芝居、おしんこ細工屋などなど、あの頃の日本はまだ貧しい時代だったのに、子供にとっては楽し

いことば、と私なぞは思っていたのですが、父親がそうだった知人は、父親本人絶対に「馬車曳き」ということばを使わなかったといえます。

私、大阪で九年間ほど、いわゆるトラックの運転手を経験したのですが、同僚が同音にいうには、職業運転手は一段低くみられている、という。結局私はそんな経験をしないまま、あるいは気がつかぬまま廃業しましたが、タクシーの運転手は今でも雲助と言われるそうですし、土方、土工は今でも陰で言われる。

さて「郵便配達」。むかしは郵便夫、配達夫など、ごく普通に遣われていました。いつ頃でしたらう。というような論があつて、郵便局員経験者の磯貝碧蹄館さんが、自ら「郵便夫」とつかっている、いやあれは本人だからいいんだ、なぞのやりとりがあつたりしたのでした。そしてついでに、「夫」がいないのなら、火夫・工夫・人夫等々全ていけないことになる。とまあ、此れは友人の弁なのですが、一

いこと楽しいものが一杯あったような気がします。やがて支那事変、第二次世界大戦へ突入する束の間の世相だったのかも知れませんが。

あの売声も、もはや私の記憶の中だけに聞こえるものなのかも知れません。

郵便配達行くさきぎさきの熟柿かな じょう

(二〇〇五年十二月)

「差別用語」ということがあります。

昔はあまり言わなかった用語ですが、近年はことに厳しい。少し古いDVDなどには、冒頭「今日では一部不適切と思われる言葉があるが」と断り書きがあつて映画が始まったりします。言わなくてはならぬので敢えていいますが、唾や盲、びっこなどは今はほとんど聞かなくなりました。いいことです。

馬車曳き、という職業がかつてあつて、ごく普通

理あるわけです。

でも言葉を制限されては困るほど我々は語彙を遣っているでしょうかね。

喜雨の尖端肺ごと走る郵便夫

碧蹄館

あるがまま毛虫も笑ふ樹木園 裕子

二〇〇七年七月、「あを」で港区白金台にある国立科学博物館附属自然教育園に吟行に行った。ここは一般の植物園と違い、自然の移り行くまま、できる限り自然の本来の姿に近い状態で残そうという独特の考え方で運営されている。観察のための通路は確保されていても、雨の後は水たまりもあれば、濡れた落ち葉に足を滑らせそうになることもある。本当にあるがままの植物園だ。この年は何故か毛虫が異常発生していた。勿論、毛虫発生注意の呼び

かけはあったが、駆除されることもなく、あるがままに放置されていた。見上げた樹の枝から、無数の毛虫が垂れ下がっていたり、歩いて行く通路にも沢山落ちていた。帽子をしつかりかぶり傘をさして歩きながら、毛虫にとっては、笑いたくなるような楽園だろうと思った。

ガンマンのあらはれさうよ秋夕焼 じょう

(二〇〇六年十一月)

実際の夕焼から触発された句なのか、DVDの映画でも見てのものか。今となつては不明だが、映画としたら多分マカロニ・ウエスタンをみてのものであるうか、と。

マカロニ・ウエスタン。いわゆるイタリア製西部劇のロケーションは全てが赭土あるいは黄色土に見える。いかにも夕焼が似あうのです。それも暑さを

さほど感じさせないところが秋、なのです。あの映画群の膾炙した理由の一つにそのロケーション、即ち赭土の丘があったりしたせいではなかったか。

三好達治が詠んでいます。

鯖売りと赭土山を越えにけり

日本でもそんな丘や岨なぞがあつて、仰ぐ時懐しさを感ずるのでした。

母のゐて印度林檎は風邪の終 喜孝

(二〇〇四年十二月)

甘い句です、おゆるしを。

子供のころはよく風邪をひいてゐた。風邪をひいて布団の中にあるのは嫌ひではないのでよくなつても布団から脱けださないでゐた。狭い家なので家族には困りものだったらう。風邪も治りかけてくるとウソのやうに食べ物が浮んでくる。出前のワンタン・

蜜柑やパインの缶詰など懐かしい。しかし治りかけの口にはれても少して止めてしまふ。印度林檎は酸味が少なく好物であつた。赤と緑のグラデーション、名前も異国情緒があつて気に入つておねだりした。何で印度なのだらう。この林檎を探し出して今口にしたらどんな感想になるのかな？。いつの世も子供の病気は親にとって大心配もの。お礼の意味も少しはあるかも、この一句に。

青林檎インド林檎の懐しや 鈴木榮子

愛と好きちがひありけり春きざす 桂子

(二〇〇五年五月)

他人を愛する事は自分の勝手、と心に言い聞かせておく謙虚さも大事。と書いていた作家の記事を読んだ事を思い出しました。

木樹の芽吹が始まる頃になると、若い男女は手を繋ぎ、うららかな午後を散歩していらつしやるのを幾組か近所で見かけます。でも嘗ては、愛情の仲であつたと思われる人達でも傷付けて犯罪になる事もあり、悲しいニュースも聞きます。春の初めの心地よい気候のように、相手を思い遣る優しさ、お互いを尊敬して愛を全うする責任をお持ちになつて下さい。と、そんなお二人をお見かけした時の私の気持です。



あをキーワード俳句辞典 (こいーこつ)

濃い

山藤の濃い花房の短さよ 芝 尚子
梅雨寒や少し濃いめの茶が溢れ 須賀 敏子
霜に立つ父子の影のどちらが濃い 定樞じょう
初午や甘辛濃い目いなりずし 長崎 桂子
待ちつかれ乗り合ふバスに濃い竜胆 芝宮須磨子

恋人

恋人をデッサンする瞳新樹光 篠田 純子
恋人を抱へるやうに笊ぬくめ 東 亜 未
雨にもめげず恋人きちがひ茄子の花 堀内 一郎

恋文

みずずかる信濃は夏と恋文に 芝宮須磨子
尼寺の恋文塚の遅日かな 田中 藤穂
裏抜けの恋文とどく五月かな 吉弘 恭子

コイン

マジックのコイン消え去る春の宵 森山のりこ

後遺症

昼炬燵ひとつふたつは後遺症

紅一点

紅一点棚田の畦の曼珠沙華
青天を突く木守柿紅一点

光陰

老梅や光陰遅々とわたるなり
光陰や娘桜と同一歳
光陰が迅く過ぐ氷菓舐めをれば

光悦

句碑守る光悦垣やしだれ梅

公園

公園を仕切る子のあり揚雲雀
公園の草を食む亀梅雨晴間
遊具なき草原公園蜻蛉生る
朝寒の公園鴉ホームレス
藪椿公園で食器洗ふ人
公園の滝にうたれる鴉かな
帰るさの公園の虫時雨かな
蚕糸公園くちばしほどの桑芽ぶく

篠田 純子

赤座 典子
木村茂登子

渡邊 友七
東 亜 未
定樞じょう

森山のりこ

江倉 京子
山莊 慶子
田中 藤穂
吉成美代子
森 理和
早崎 泰江
芝 尚子
竹内 弘子

MSCファンタジアクルーズ

赤座典子

春雷の空港で待つジェノヴァ行き

鷗過ぐホテルの朝餉のどけしや

復活祭フェラーリ広場にぎはへり

教会は坂の上なり春夕焼



漫ろ歩くレモンの小道春の虹

清明やハイテクモスクの開く屋根

春潮に飛行機雲の降りてくる

春タベプールを占める家族連れ

金色に輝く巻毛春闌くる

春暁の湾に収まるクルーズ船

春時雨本当に甘いマデiraワイン

ハカランダの薄紫に春日射す

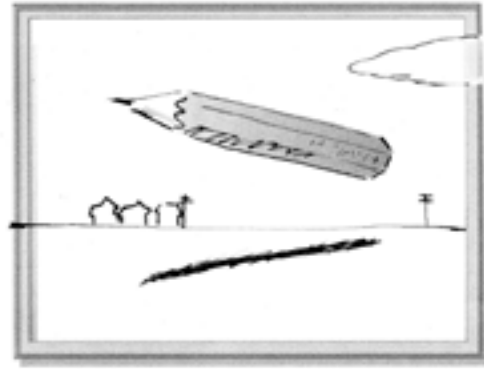
春の雲横目の鷗船に沿ふ

大朝寝してゐる終日航海日

悠久のフォロ・ロマーノに鼈草

記念写真うーんと背伸び春惜しむ

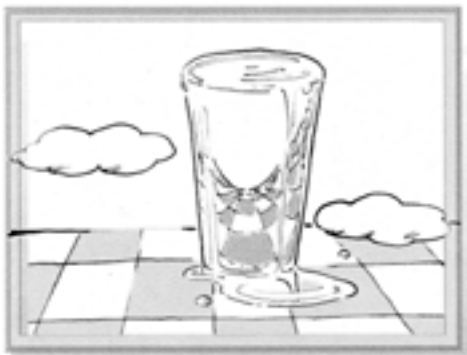
緊急入院
斎藤裕子



病室で漏れ聞く人生梅雨曇
目覚むれば癌てふ思ひ夏の蝶
梅雨晴や退院決まるお隣さん
病室に響くおめでと梅雨晴間
梅雨晴や隣も前も空きベッド
お見舞に俳句が届く虹の朝

梅雨晴や点滴の吾に通ひ夫
素っぴんをお見せしますわ額の花

入院は俳句三昧額の花
肋打つ鼓動の速さ梅若葉
畳打つ鼓動の強さ夏の蝶
五月晴めきめき上がる主夫の腕
うつちやりといふ手もあるさ鳳仙花



毎月25日発売

定価1200円(税込)

月刊

俳句界

2015年8月号

〈特集〉

漱石と龍之介

〓 文人俳句の頂点

● 漱石、龍之介年表

● 漱石50句抄、龍之介50句抄

● 漱石と子規との交流

● 龍之介と万太郎との交流

● 俳句に関する名著

● 漱石『草枕』龍之介『芭蕉雜記』『枯野抄』

● エッセイ 私の好きな：

漱石俳句 半藤末利子（漱石孫）

龍之介俳句 芥川吹子（龍之介孫）

〓 ラビエ

俳句界NOW 綾野南志

本セクション結社「九年母」小杉伸一路

私の一冊

松浦加古「蘭」

戦後70年 極限の戦時下で残った俳句

シベリア収容所での句会／弾圧下での俳句

片山桃史の従軍俳句／銃後の妻 他

● お邪魔します 書齋訪問 山崎十生「紫」

特別作品50句

稲畑汀子

魅惑の俳人

林徹

*インタビュー 田島和生

対談

佐高信の甘口でコンニチハ！

谷村志穂（作家）

別冊

投稿俳句界

一流選者29名！

日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F

TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

二〇一五年七月号

発行日

七月七日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・9828・4244

ファックス

03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・松村美智子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費

一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替

00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えします。

題詠の募集
 「橋」読み三十句。締切り八月末日。
 これは勉強、鍛錬の一助ですので「あを」には掲載しません。参加者のみに小冊子を作りお渡し致します。後刻この中から各自「あを」への投句は自由です。参加費無料。
 大分前になるが高島茂・竹内弘子さん等と題詠五十句と称してせつせと句を量産した時期があった。そんな小冊子を見つけて又はじめてみようといふ気になりました。（喜孝）